

ハイデルベルク信仰問答講解説教 17 「よみがえりの命」(2011年12月18日 礼拝説教)

【聖書箇所】

【ダビデの詩】わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞつて／聖なる御名をたたえよ。わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。主はお前の罪をことごとく赦し／病をすべて癒し、命を墓から贖い出してください。慈しみと憐れみの冠を授け、長らえる限り良いものに満ち足らせ／驚のような若さを新たにしてください。(詩編103:1-5)

さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれぬようにしなさい。あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。(コロサイ3:1-4)

【説教】

今日は、第17主日、問45のところを通して、御言葉に聴いてまいります。ここは使徒信条の「三日目に死人のうちよりよみがえり」のところであり、言うまでもなく、ここでは「復活」の信仰が問題になります。皆さんは復活をどのように捉えているでしょうか。もちろんキリスト教信仰において復活は大変重要なものですから、求道者会、受洗準備会等では、その教理の学びを必ずいたします。また教会では毎年イースターを迎えますが、その時にキリストが死んで三日目に墓からよみがえった御言葉を聴きます。そのように繰り返し復活のことは教会で聴くのです。しかし案外、わたしたちは復活ということをも自分勝手に想像したり、見当違いなことを考えていたりするのではないのでしょうか。

例えば、復活というと、すぐ死んだ後の話、あるいは死後の世界のような感覚で捉えていることがあります。死んだ後に、また別な命が始まって生きていくというようなもの。また復活が、もう一度この世の命に復帰することであるかのように考えたりする。使徒信条の「身体よみがえり、永遠の命を信ず」と告白する時に、わたしたちはこの地上の命が永遠に続くものと考えてはいないのでしょうか。もしそのように復活を考えているならば、それは聖書の信仰ではありません。それでは、復活の本当の喜びは見出せないでしょう。少なくとも死後の話であれば、今は関係のない話になります。またもう一度この世の命に復帰するならば、わたしたちはまたこの罪の状態に戻ることでしょうか。

ハイデルベルク信仰問答は、「キリストのよみがえりは、わたしたちにどのような益をもたらしますか」と問いかけています。それは明らかにわたしたちの「利益」となるのです。わたしたちがこれを信じることで、それがわたしたちの宝になる。信じて良かったということになる。パウロは「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」(Iコリント15:14)と述べています。復活があるから、わたしたちは空しい思いをしないで済むのです。わたしたちの伝道も、信じてきたことも、すべてこの復活の信仰で報われるのです。わたしたちの復活の信仰はそうなっているのでしょうか。ただ漠然と将来そうなるかもしれないと考えているだけになっていないでしょうか。それではもったいないのです。今のわたしの利益にならないといけません。本来、復活の信仰とはそういうものです。

早速、信仰問答に注目しましょう。問45を読みます。ここに三つのこと、これは三つの利益と言ってもよいでしょう。利益という言葉が気になるのであれば、「恵み」と言い換えてもよいでしょう。復活の恵みを信じるのがわたしたちの今を生きる力となるのです。それはどのようなものなのでしょうか。

第一は、「わたしたちのために獲得された義にわたしたちをあずからせてくださる」とあります。復活の信仰は、まず何より

わたしたちが義とされることと深く結びついております。このことは以外とわたしたちが見落としていることではないでしょうか。復活というと、死からのよみがえりのことをすぐ考えますが、信仰問答は、まずわたしたちが義とされることに注目しています。実はここが復活の信仰の急所です。

ここで信仰問答はローマの信徒への手紙第4章25節を根拠にしています。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです」やはり聖書もどのように復活を義と結びつけているのです。義とは何でしょうか。それは神さまとの正しい関係のことです。罪ゆえに神さまから遠く離れていたわたしたちが、もう一度、神さまと近い関係に回復されることです。そのために主イエスは復活されたというのです。

来週、わたしたちはクリスマスを迎えます。神の独り子が地上にお生まれになられた。それは神さまが遠く離れていた人間のところに関わりなく近づいて来られた出来事であり、その神の御子の名前はいにしへの時代の預言によれば「インマヌエル」(神は我々と共におられる)という名前です。キリストの誕生が神と共に生きる道を開いたのです。それがクリスマスの出来事であり、

ではこの神さまと共に生きるとはどういうことでしょうか。それはあのエデンの園で人間が罪を犯す前の状態、神さまに祝福された神さまの似姿としての人間への回復と理解してよいでしょう。神さまの御言葉に聞き、きちんとそれに応えることができる関係ということです。そこに本来の祝福された人間の姿があります。主イエスはわたしたちをそのような回復させるために、十字架で死にそして復活された。それはただ肉体の死だけを考えているのではない。それは罪の結末としての死であり、罪の結果、負わなければならなくなった死です。主イエスは十字架でこの罪の死を負い、そして復活によって、この死を克服された。完全に罪の死を打ち負かしたのであります。そこに復活の喜びがあります。復活はただ肉体の死を打ち負かしたのではなく、罪の死、罪の結果死ななければならなくなった、その状態から人間を解き放ったということなのです。

もし、復活ということがこの世の命への復帰ならば、わたしたちはもう一度この罪の状態に戻ることを意味するでしょう。罪の人間としてもう一度生きていくということです。けれどもそうではないのです。この罪の状態に後戻りするのではない。この悲惨をまた味わうのではなく、この罪を完全に打ち負かし、義とされ、神さまと共に、その祝福のもとに生きていくことなのです。そこに復活の信仰の最も重要なところがあります。

さて、そうであれば、第二のことも充分うなずけるでしょう。「第二に、その御力によって、わたしたちも今や新しい命に生き返らされている、ということ」ここで「今や」という言葉に

注意してください。わたしたちは、将来のこととして復活を考えているかもしれませんが。死んだ後のこと。でもそれでは不十分なです。復活はもう今、現在始まっている。洗礼を受けて、キリストに結ばれて生きるということは、この地上にありながら、すでに復活の命を生き始めているということになるのです。ローマの信徒への手紙に「わたしたちはキリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます」(6:8)「あなたがたも罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい」(6:11)とあります。「神に対して」というのは、神さまと共に、神さまと面と向かってということです。罪の状態は、神さまから離れ、神さまの御顔を仰ぐことができなかつた状態です。でも今や、わたしたちは罪を赦され、義とされて、神さまに相對して生きることができるようになりました。この神さまと共に生きる命、それこそが復活の命であり、それは何も死んでからの話ではありません。信仰によって洗礼を受けてキリストと結びついている者はすべてその瞬間からこの復活の命を生き始めているのであります。

エフェソの信徒への手紙に、「神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」(4:24)とあります。この復活の命は、神さまにかたどって造られた「新しい人」それは本来あの墮罪以前の祝福された人間という意味です。でもわたくしは、この新しさとは単に墮罪以前というよりも、キリストによる新しさであり、完全に罪に死んだ新しさで理解すべきであると思いません。この新しさがわたしの中で始まる。

今日はコロサイ書の御言葉を読みました。「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい」この上にあるものを求める姿勢。「上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれぬようにしなさい」そういう新しさを持っている。今日の間答では「新しい命」とあり。「命」というのは英語ではライフです。ライフは命だけではない。この命を使って生きるすべての営み、生活を含みます。もはやわたしたちの生き方そのものが新しくされる。

このコロサイ書ではこの後に「古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです」(3:9-10)とあります。そういう造り主の姿に倣う新しい自分がもう始まっている。洗礼を受けるということはそういうことなのです。わたしたちはこの復活の命、神さまと共に生きる命を自覚しなければなりません。洗礼を受けてもあまり変わらないとあきらめているところがある。でもそうではない。洗礼を受けるということは、確実に自分の中で新しい命が始まるということなのです。ただまだ完成はしていません。完成は終末において、新しい天と地の成る時、それが完成のときでしょう。今はその途上にある。そこに向かって「日々新たにされて」いくのです。わたくしは、ここは重要と思います。何となく惰性的に変わらない日々を過ごしていくのではない。今日も明日も変わらない。毎日の繰り返しではなく、確実に完成に向かっていくことを意識する。昨日より今日、今日より明日。そういう「上にあるものを求める」生き方がわたしたちに与えられています。

最後に、第三の恵みを確認して終わりにします。キリストのよみがえりが、わたしたちのよみがえりの保証、担保となっているということです。Iコリントに「キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂とされました」(15:20)とあります。それはキリストの復活にわたしたちも続くということなのです。それはキリストに結ばれて一つの命を生きているからに他なりません。キリストと共に死に、キリストと共に生きるのです。キリストに結ばれているならば、わたしたちの人生はそのように保証されている。これ以上のことがあるでしょうか。わたしたちの存在は消えてなくなるのではない。永遠に神さまと共にあるのです。キリストがその身体にわたしたちをつながらせ、そのようにしてくださいました。ここにす

べての平安があります。

先週は坂牟田義昭兄を天に送りました。お元気になって教会に帰ってこられるものと誰もが思っておりました。あの大きなお声がどこかに聞こえてきそうです。召される一週間程前でしたが、病床聖餐に共に与りました。すでに横になっておられましたが、パンを食べ、そして杯はわたくしが口元に注いで、それをお飲みになられました。「ありがとうございます」と言われ、本当に安心されたお顔をされました。もういつ召されてもいいというお顔です。あのシメオンが「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいませ」(ルカ2:29)と言った、まさにそのような姿でありました。その安らかさは、何よりキリストと一つにある平安です。その平安こそが死の淵にあつてもなおそこでわたしたちを支えるのです。

その後何度か病室を訪ねましたが、ヨハネによる福音書の御言葉を読みました。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」(ヨハネ11:25)この御言葉は教会の墓地の墓石にも刻まれています。兄弟は、このよみがえりの命を信じて天に召されました。それは信仰者として本当によい模範であります。わたしたちもそのように続くのです。キリストに結ばれ、よみがえりの命をすでに生きていることを確信して、安心してこの世の旅路を続けていきましょう。お祈りをいたします。